

授業探訪 言語教育科目自由科目〈University Lecture A〉

英語で学ぶ学問の世界

森 聡美

はじめに

1年次の英語必修科目の単位を修得し終えた学生を対象とした全学共通カリキュラム（以下全カリ）言語副専攻（英語）コースが2011年度より開設され、多くの分野で複数のレベルの科目が展開されている。外部試験（TOEFL, TOEIC等）のスコアを用いて3つのコースがレベル別に設定されているが、その中で最も難易度の高い「オナーズ・コース」の科目の一つであるUniversity Lecture Aを2013年度前期に初めて担当した。「オナーズ・コース」は、すぐ下の「アドバンスト・コース」を修了しているか、「インディペンデント・コース」あるいは「インテンシブ・コース」を修了した後に「オナーズ・コース」の基準点をクリアすることが履修の条件になっているため、他の科目より遅れて2012年度からの展開となった。そのため、まだ経験の浅い科目であるが、全カリ英語科目の最高峰のレベルにあるこの科目の概要と、実際にどのような授業が展開されたかを筆者の担当経験に基づきご紹介したい。

授業目標と授業内容

University Lectureは週に1回の英語による講義科目で、複数のクラスが用意されている。統一シラバスで定められている「オナーズ・コース」の目標は「英語圏の大学、大学院の専門科目に対応可能な英語コミュニケーション能力の獲得を目指す」というものである。外部試験で一定のスコア（TOEFL-iBT 87点以上、TOEIC 785点以上等）を獲得している学生、あるいは「アドバンスト・コース」を修了した学生が履修することから、英語圏の大学・大学院で専門の講義科目を受講するために必要な英語力を持っている履修者を想定し、その力を更に伸ばすことを目標として授業計画を組んだ。イメージとしては、専門性はあるがどの学部 of 学生でも理解可能な、いわば全カリ総合科目を英語で実施する、というものである。言うまでもないが、講義、授業中のディスカッションはすべて英語で行い、課題も英語で回答することを求めた。

授業内容は筆者の専門分野であり、学生にとっても自身の経験に基づいて考えやすいと思われる「バイリンガリズム入門（Introduction to Bilingualism）」を取り上げた。バイリンガリズムとは個人ならびに社会における二言語あるいは多言語併用について扱う学問領域であるが、様々な学部 of 学生が履修することを想定し、個人における二言語使用（言語習得、言語教育、言語使用、認知の特徴等）と社会における二言語併用の実態とその問題点（言語選択、言語の普及と衰退、言語政策、言語教育政策）等、幅広い領域を扱うことにした。

授業計画としては、前期の前半で個人における言語使用、後半で社会における二言語併用に関する諸問題について扱った。履修者が4人と少なかった

こともあり、ハンドアウトと板書を組み合わせながら講義を行った。適宜意見を求めたり、また学生からの質問を促すなどして、学生が発言する機会を極力設けるようにした。また、3週に1度、授業内容に関する発展的な課題（エッセイライティング）を課し、各テーマについてインタビューや文献調査等に基づき考えをまとめてくるよう指導した。更に、時間が許す限り書いてきた内容について簡単な口頭発表やディスカッションをさせ、各テーマについて学生が発展的に考え、意見が述べられる機会をできるだけ設けるようにした。このようにして、筆者が担当するUniversity Lectureは、英語のスキルを教える授業ではなく、あくまで英語で講義を行う、というコンセプトの下で授業を構成し、総合的な英語力を高めると同時に専門的な知識も習得できるような科目になるようにした。

英語で講義を聞くということ

日本の大学生の平均的な英語力では、一定以上の時間、ある程度まとまった内容の講義、ニュース、映画等を聞きとめることは決して容易なことではない。リスニング力そのもの（英語の音声を取り取る力）や大学生に見合った英語の語彙力がまだ十分に習得されていないことに加えて、ニュースであれば報道されている地域や事象に関する知識、映画であれば文化的な背景知識等が不足していることで一層聞きとりが困難になるであろう。大学における講義であれば、教養レベルの知識と論理的思考力が伴わなければ理解は難しいであろう。たとえ外部試験のスコアが高く、一定の科目の履修は済んでいても、英語圏の大学や大学院と同じレベルの講義を行った場合、学生がどれだけついてくることができるのか

は未知数であり、不安な部分でもあった。そのため、当初は話すスピードを落とし、語彙もあまり専門的で、難易度の高いものは避けるようにすることも考えていた。しかし、実際に教え始めてみると、そのような調整はほとんど必要なかった。学生たちが講義の内容を十分に理解していることは、クラス内の反応や質疑応答、ディスカッション、課題で確認することができた。それゆえに、極めて自然なスピードで、語彙レベルの調整をすることもほとんどなく講義を行うことができた。言語学や心理学を専攻している学生はいなかったが、全員が帰国生や留学経験がある学生たちであり、取り上げたテーマの多くが自分たちに実体験と結び付けて考えられるものであったので、理解しやすい部分もあったであろう。とは言え、総じて学生たちのリスニング力は極めて高く、彼らの学習経験等にも支えられ、講義内容の理解は十分になされたと考えている。

予習として英語で専門書を読むということ

オプションな課題として、英語で書かれたバイリンガリズムに関する入門レベルのテキストの該当箇所を、講義を受ける前に読むように指示しておいた。必ず読んでおくようにとは言わなかったので全ての学生が事前に読んできたとは言えないが、一部の学生は指定された箇所を全て読んできていた。そうすることで予備知識が付き、講義の内容が理解しやすかったとのコメントもあった。学生たちの中には、専門書を読んでよく理解できなかった点を講義で確認することもできたであろう。その意味では、事前に専門書を読ませてから講義を受けさせることは、専門領域についての学習が深まる

だけでなく、当該言語の総合的な能力を高めることにもつながるのではないかとと思われる。値段が高すぎたり、取り上げられているテーマが授業で取り上げるものと異なるなどの理由から、適当なテキストを指定できなかったことは残念なところではあるが、今後は講義に合ったテキストを探し出すなり、あるいはなんらかの工夫をするなどして、学生があらかじめ専門書を読んで授業に臨むような授業計画が組めればと考えている。

英語で学術的なディスカッションをすること

言語習得では、まず初めに受信スキル（聞く読む）が発達し、その後で発信スキル（話す書く）が発達すると考えられている。学術的な内容を聞いたり読んだりするスキルはかなり難易度が高いものであるが、そのような内容を話すスキルはさらに高度な言語スキルである。しかしながら、今回の受講生たちはみな自ら進んで質問をし、教員からの問いかけに対しては理路整然と考えを述べるなど、その発信力、ディスカッション能力は目を見張るものがあった。もう少し計画的にディスカッションやそれに基づくレポートを課すなどの活動を加えていれば学生たちの英語力をさらに伸ばすことができたのではなかったか、というのが教員側の反省点である。

英語で学術的なエッセイを書くということ

上述したように、原則として3週に1度、講義内容に関する発展的な課題を課した。最初はインタビュー等に基づき二言語併用について分析をする課題から始め、その後は文献調査に基づき

考えをまとめる課題へと発展させた。後者は特に学術的に内容の濃いエッセイの執筆であり、難易度の高い課題であったが、筆者の指示に従って、文献調査に基づいて書かれた英語の学術論文や専門書等を引用しながらエッセイを執筆するなどして、学生たちは丁寧に取り組んでいた。しかし、やはり専門性が高いエッセイの執筆となるとアカデミックなエッセイライティングを学んでいる必要があり、その点についてはまだ力不足であると感じた。アドバンストコースにアカデミックライティングのクラスがあるが、そのクラスを1度履修しただけではアカデミックなエッセイライティングの習得は難しく、繰り返し指導が必要であろう。この点については今後、前もって履修しておくことを強く推奨する科目として指定するなり、クラス内での指導を検討するなど、改良を重ねていきたい。

まとめ

University Lectureは、英語圏への留学が可能な英語力をもっており、その力を更に伸ばしたい、あるいは帰国生であれば習得した英語力を維持したいという強い動機づけを持った学生たちが履修する科目である。このような学生たちを指導する上でのこれからの課題は、どのような学力が不足しているのかを的確に分析し、講義科目としての特徴を生かし、不足している英語力を補うべく授業計画を立てることではないかと考える。高度な英語力を持つ学生たちの英語力を更にもう一段上のレベルへと引き上げることができるよう、今後とも試行錯誤を続けていきたい。

もり さとみ

（本学異文化コミュニケーション学部
准教授）